

---

---

仙台市立小・中学校の  
一定規模確保に向けた基本方針

---

---

平 成 2 0 年 8 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

はじめに	1
I 基本方針の策定にあたって	2
1 基本方針策定の趣旨	2
2 基本方針の位置付け	2
3 検討委員会からの提言	3
4 基本方針の見直し	3
II 市立小・中学校の現状と課題	4
1 学校規模の現状	4
2 小規模校の「よさ」「課題」	6
(1) 学校長アンケート	6
① 小規模校のよさについて	6
② 小規模校の課題について	7
③ 適正な学級数について	9
④ アンケート結果から	9
(2) 学校規模に起因する課題	10
III 一定規模確保の必要性	11
1 学校の役割	11
2 実現すべき教育環境	11
IV 一定規模の基準と考え方	13
1 学級数	13
2 通学距離	13
3 一定規模を確保する際の手法	14
V 実施方針の策定について	15
VI 統合に向けた話し合いを進めるにあたって	15

## はじめに

子供の成長過程において学校が果たす役割は、「家庭」「地域」といった身近な世界から「社会」という広い世界へと旅立つためのプラットフォームのようなものです。

子供たちはこの世に生を受けてから、はじめは「家庭」という環境のなかで育てられていきます。「家庭」は、子供たちが成長していくなかで最も基本的なエリアであり、一番初めに自分以外の人間とのかかわりを持つ場でもあります。子供たちは「家庭」のなかで、言葉や生活の基本となる習慣を身に付けながら、少しずつ外の環境へとそのエリアを広げていきます。

「家庭」の次に子供たちが接する環境は「地域」です。子供たちにとって「地域」は、それまでの「家庭」とは違った「他者」と触れ合うことができる場であり、そのなかで、両親以外の大人や同世代の人間などから、様々なタイプの人間の存在や、ものの考え方があることを学んでいきます。子供たちは「地域」における「他者」との触れ合いを通じて、自立に向けた成長を遂げ、やがて「社会」に出ていきます。

学校は、子供たちが「家庭」から「地域」、「地域」から「社会」へと自分自身のエリアを広げていく過程で、それぞれを繋ぐ橋渡しの役割を担っています。そのなかで子供たちは、いわゆる「読み・書き・計算」といった基礎的・基本的な知識・技能を学ぶだけではなく、それを基に考えをより深めたり、自分の考えを表現する方法、多くの人間との関わり方など、生きていくための力を身に付けながら、徐々に「社会」への適応力を高めていきます。

学校がそうした役割をしっかりと果たしていくためには、「家庭」や「地域」との連携はもちろん、学校自体が十分な教育環境を備えていなければなりません。

今回策定した「仙台市立小・中学校の一定規模確保に向けた基本方針」は、「子供たちの成長を考えた場合に、学校教育として何が必要であるのか」ということを第一に考えながら、学校が本来担うべき役割をしっかりと果たすことができるよう、市立小・中学校における教育環境の整備を図り、その向上を目指していくための教育委員会としての考え方をまとめたものです。

平成20年8月

仙台市教育委員会教育長 荒井 崇

## I 基本方針の策定にあたって

### 1 基本方針策定の趣旨

全国的な少子化の進展に伴い、児童生徒数が減少しています。これは仙台市でも例外ではなく、市立小・中学校の児童生徒数は、ピーク時の約7割にまで減少しています。これに伴い、多くの学校で学級数が減少し、以前は山間部などにしか見られなかった法令上では複式学級<sup>※1</sup>となる学級が、団地の学校にも見られ始めています。

このように学校規模が小さくなると、教育効果の面で様々な課題が生じてくることが考えられます。そのため教育委員会では、平成17年2月に「仙台市立小・中学校適正規模等検討委員会」（以下「検討委員会」と表記。）を設置し、市立小・中学校の適正な規模・配置の基準や考え方、それらに基づいた学校ごとの具体的な方策についての検討を依頼しました。

その結果、平成19年5月に検討委員会から最終報告が提出され、このなかで、小学校12学級以上、中学校9学級以上という学校として必要な一定の規模（以下「一定規模」と表記。）や、通学距離の基準等のほか、一定規模の基準に満たない小・中学校40校についての具体的な方策が示されました。

教育委員会では、この最終報告を受け、今後の児童生徒数の動向や教育機関として学校が果たすべき役割を踏まえた学校のあり方についての長期的な視点に立った検討を行いました。その結果、教育委員会としては、①将来的な児童生徒数の減少に対応しながら、教育の機会均等を確保していく必要があること、②児童生徒に、望ましい教育環境のもとで、目指すべき効果がしっかりと得られるような教育活動を行っていく必要があることなどから、「仙台市立小・中学校の一定規模確保に向けた基本方針」（以下「基本方針」と表記。）を策定するに至ったものです。

### 2 基本方針の位置付け

基本方針は、「仙台21プラン(仙台市基本計画)」における基本的方向性<sup>※2</sup>を踏まえ、未来を担う子供たちの確かな学力と、健やかな心と身体を育む教育内容

---

※1 公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律第3条及び同法施行令第2条の規定により、当該学校の児童生徒の数が著しく少ない場合等において、数学年の児童生徒を一つの学級に編制する場合の通称。

※2 「仙台21プラン」は、本市の基本構想に定める4つの都市像（「やすらぐまち」「うるおう杜」「にぎわう都」「かがやく人」）を実現するために、長期的な視点から取り組むべき施策を体系的にまとめたもので、このうち学校教育については、第4章「未来を創造する世界の学都をめざして」のなかで、以下の基本目標により施策の推進を図ることとしている。

- ・家庭・地域・学校の連携のもとに、21世紀を担う子供たちの調和のとれた人格の形成を目指す。
- ・時代の潮流に積極的に対応する教育と子供の個性を尊重する教育を充実する。
- ・学校教育環境や多様な校外学習環境を整備し、子供が自ら考え、学ぶ意欲を養う機会をつくる。

の充実を図るために、学校規模などの教育環境を向上させることを目的とするものです。

そのうえで、教育委員会の中長期的計画である「仙台市教育ビジョン(仙台まなびの柱21)」の基本的な方針※を実現するために、今後の方向性とそれを実現していくための手法や考え方を示し、その推進を図るものです。

### 3 検討委員会からの提言

平成 17 年2月に設置した検討委員会は、大学の教授や弁護士などの学識経験者や、連合町内会長による地域団体代表者、各学校のPTA会長などによる保護者代表者、元小・中学校長による学校関係者を委員として構成し、小規模化が進む市内小・中学校における教育環境の現状や課題を改善するためにはどのような方策が望ましいのかということについて、「子供にとってどうか」という視点を基本としながら検討を行いました。

検討にあたっては、各学校の児童生徒数や通学距離などの基本的なデータのほか、将来推計や隣接校との地理的な接続性などについて、できる限りの確認を行うとともに、関係者(学校長、保護者)からのヒアリングや現地の視察などにより現状の把握に努めました。

検討委員会では、こうした資料等を基に、学校の規模・配置についての基本的な考え方と、それぞれの学校の将来的な方向性について全市的な視点から提言を行っています。

教育委員会では、検討委員会における委員それぞれの立場からみた専門的な意見等が盛り込まれた最終報告をできる限り尊重しながら、基本方針の策定を行いました。

### 4 基本方針の見直し

この方針は、市立小・中学校の一定規模確保に向けた、現時点における教育委員会としての考え方についてまとめたものです。

したがって、今後、国の教育制度の改変等、状況の変化があった場合には、必要に応じて見直しを行います。

---

※ 「仙台21プラン」に定める21世紀の新しい学都・仙台づくりを進めるために、以下の3つの柱を、仙台市教育委員会が取り組むべき基本的な方針としている。

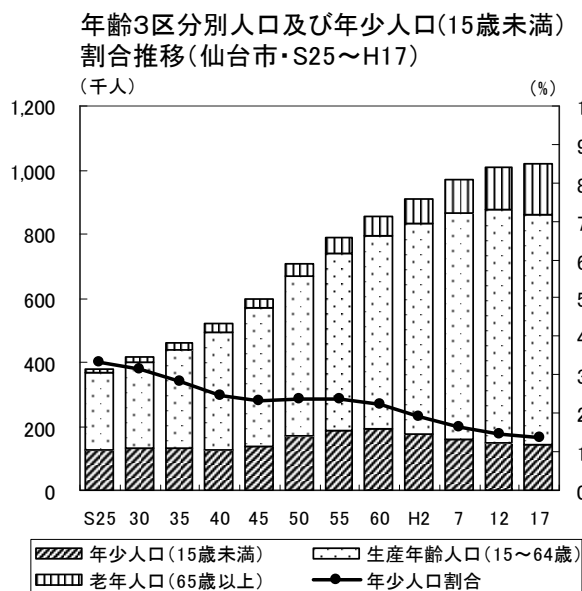
①まなぶ力をはぐくむ    ②まなぶ機会を広げる    ③まなぶ資源を豊かにする

## Ⅱ 市立小・中学校の現状と課題

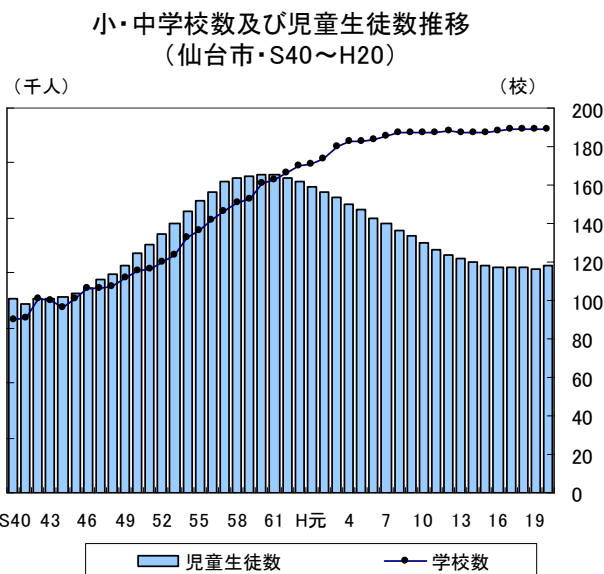
### 1 学校規模の現状

昭和 40 年以降でみた場合、市立小学校の児童数は、ピークとなる昭和 58 年の 79,085 人に比べ、平成 20 年は 55,138 人と約 70%に減少しています。同様に中学校の生徒数も、ピークとなる昭和 62 年の 40,039 人から、平成 20 年は 26,336 人と約 66%に減少しています。

こうした状況は、学校ごとの学級数にも現れています。学校 1 校あたりの平均学級数は、それぞれのピーク時と平成 20 年を比較した場合、小学校では 20 学級から 15 学級に、中学校では 18 学級から 13 学級になっており、それぞれ少なくなっていることがわかります。



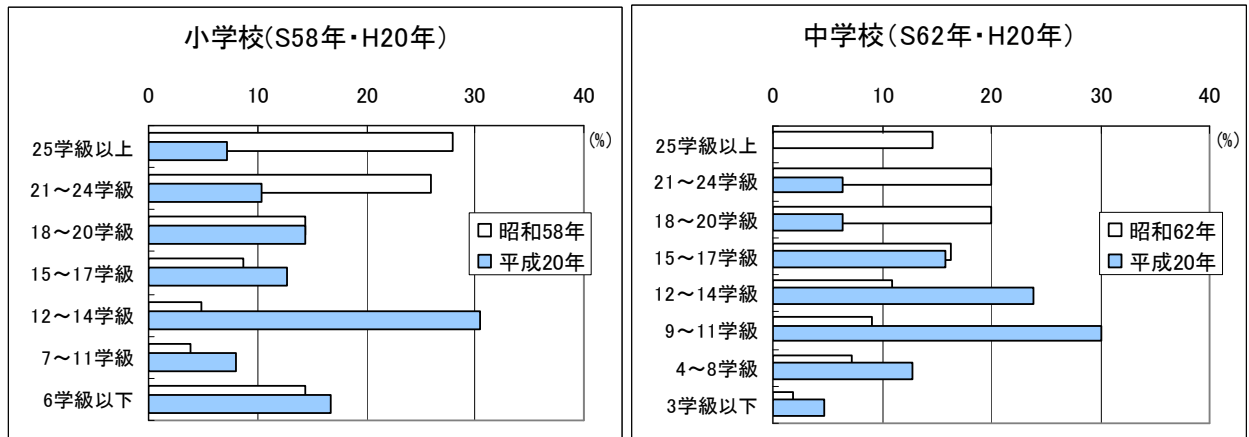
総務省統計局「国勢調査結果報告」より  
※合併以前の旧泉市、旧宮城町、旧秋保町の数値を含む。



宮城県「学校統計要覧」より  
※合併以前の旧泉市、旧宮城町、旧秋保町の数値を含む。  
※グラフは小・中学校を合わせた数値。それぞれの個別データについては巻末参考資料参照。

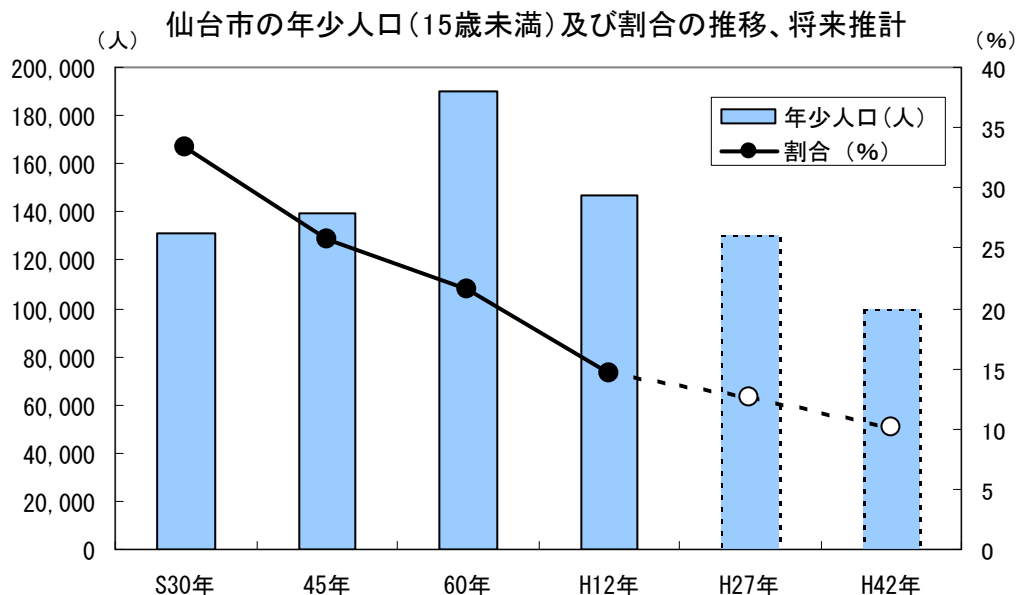
さらに、学級数別の学校数割合について児童生徒数のピーク時と平成 20 年を比較すると、小学校では、ピーク時には 21 学級以上の学校が全体の 50%以上を占めていましたが、平成 20 年では全体の 17.6%に減少し、12～14 学級の学校の割合が大きく増加しています。中学校でも同様に、ピーク時は 18 学級以上の学校が全体の 50%以上を占めていましたが、平成 20 年度では 12.6%にまで減少し、それに代わって 9～11 学級、12～14 学級の学校の割合が大きく増加しています。

### 学級規模別学校数割合（児童生徒数のピーク時と H20 年の比較）



宮城県「学校統計要覧」より  
 ※合併以前の旧泉市、旧宮城町、旧秋保町の数値を含む  
 ※昭和40年以降のデータについては、巻末資料参考

このように、児童生徒数の減少に伴い、市立小・中学校の規模は縮小傾向にあります。国の市町村別将来推計を見ると、少子化の傾向は今後も続いていくことが予想されており、その結果、将来的な学校規模はさらに縮小し、教育活動に様々な影響が出てくることが懸念されます。



資料：仙台市企画市民局

※推計値は、仙台市企画市民局において過去の実績値をもとに  
 コーホート要因法により推計した暫定値である。

## 2 小規模校の「よさ」「課題」

### (1) 学校長アンケート

学校規模が小さくなると教育活動に様々な課題が出てくると考えられます。その一方で、小規模校には小規模校なりのよさがあるという考え方もあります。そうした小規模校のよさや課題について、実際の教育現場に携わる学校関係者はどのように考えているのかを確認するため、市立小・中学校の全学校長を対象にアンケート調査を行いました。以下はその結果をまとめたものです。

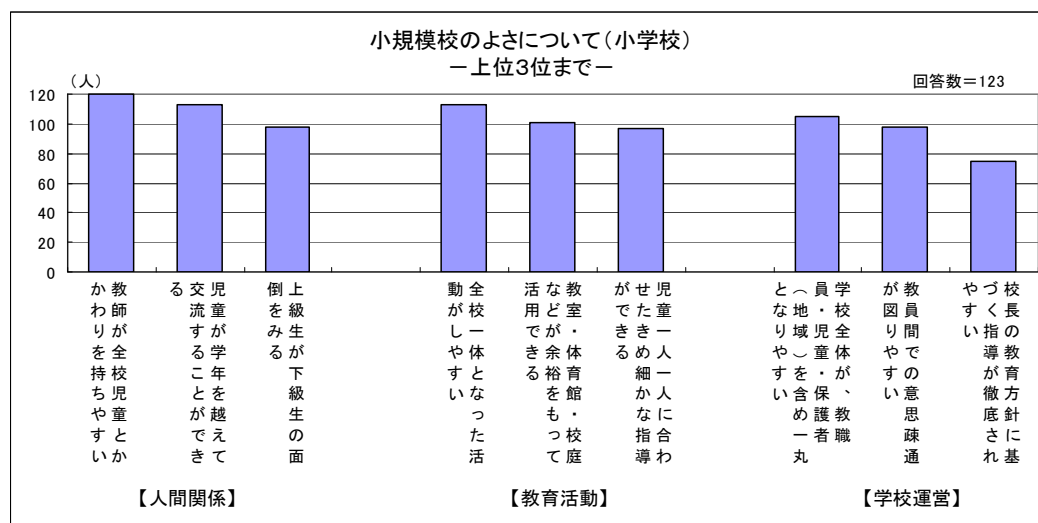
なお、ここで言う小規模校は、検討委員会で示された小学校 12 学級未満、中学校 9 学級未満としました。

#### ① 小規模校のよさについて

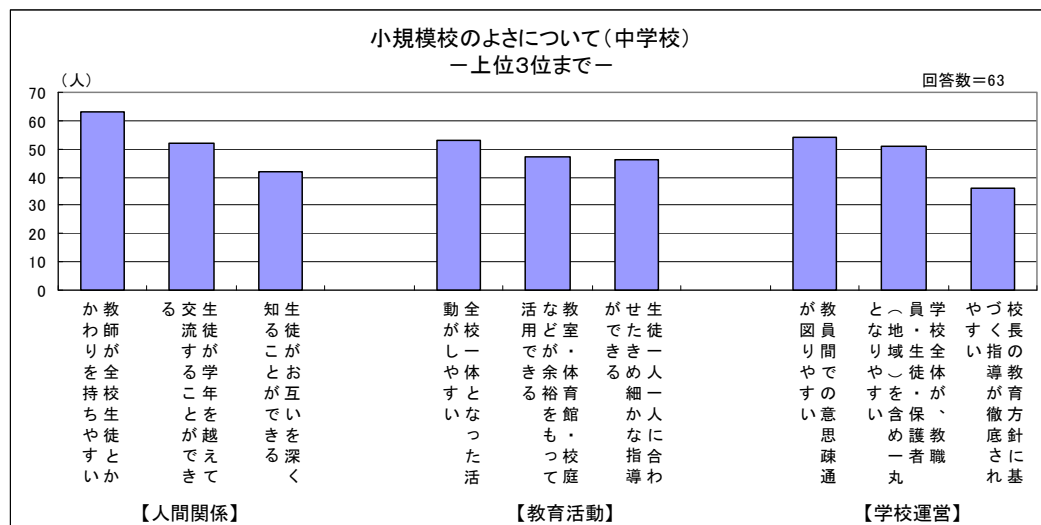
小規模校におけるよさについての調査結果をみると、人間関係面では、小・中学校ともに「教師が全校児童（生徒）とかかわりを持ちやすい」が最も多く、次いで「児童（生徒）が学年を越えて交流することができる」が続いています。

次に教育活動面では、小・中学校ともに「全校一体となった活動がしやすい」が最も多く、次いで「教室・体育館・校庭などが余裕をもって活用できる」が続いています。

学校運営面では、小学校は「学校全体が、教職員・児童・保護者（地域）を含め一丸となりやすい」が最も多く、次いで「教員間での意思疎通が図りやすい」が続いています。中学校は小学校とは逆に「教員間での意思疎通が図りやすい」が最も多く、次いで「学校全体が、教職員・生徒・保護者（地域）を含め一丸となりやすい」が続いています。







また、こうした小規模校のよさについて、12 学級(9 学級)以上の規模の学校でも、工夫次第ではそうしたよさが出せると考えられるものについて尋ねたところ、人間関係面で「児童(生徒)が学年を越えて交流することができる」、教育活動面で「児童(生徒)一人一人に合わせたきめ細かな指導ができる」、学校運営面で「教員間での意思疎通が図りやすい」が、小・中学校ともにそれぞれ最も多くなりました。(巻末参考資料参照)

## ② 小規模校の課題について

小規模校における課題についての調査結果をみると、人間関係面では、小学校で「児童間でお互いの評価が固定化し、新たな個性が見出しにくい」が最も多く、次いで「クラス替えができない」が続いています。中学校では「生徒の適性や人間関係を考慮したクラス替えができない」が最も多く、次いで「生徒間での切磋琢磨が少ない」が続いています。

次に教育活動面では、小学校で「体育での集団ゲームやダンス、音楽の合唱などの学習が難しい」が最も多く、次いで「授業での意見・感想等が固定化し、多角的な見方・考え方や、新たな着想を得るなどの発展性が乏しい」が続いています。中学校では「生徒が希望する部活動ができない」が最も多く、次いで「教員が出張等になると自習になることが多い」が続いています。

学校運営面では、小・中学校ともに「(教員)一人あたりの校務分掌数が多い」が最も多く、次いで、小学校では「配置される教員の資質によって、学校運営に影響を与える場合がある」、中学校では「免外指導※を余儀なく

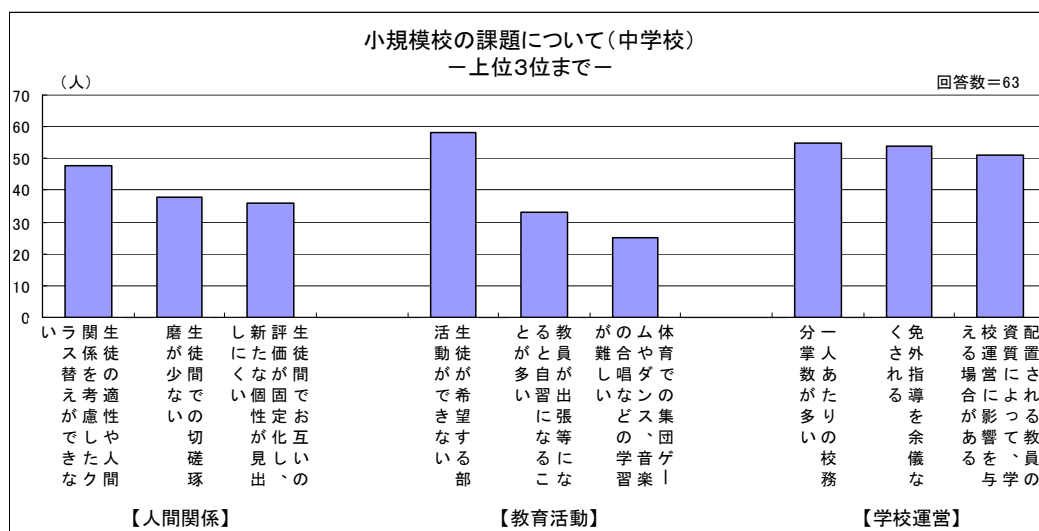
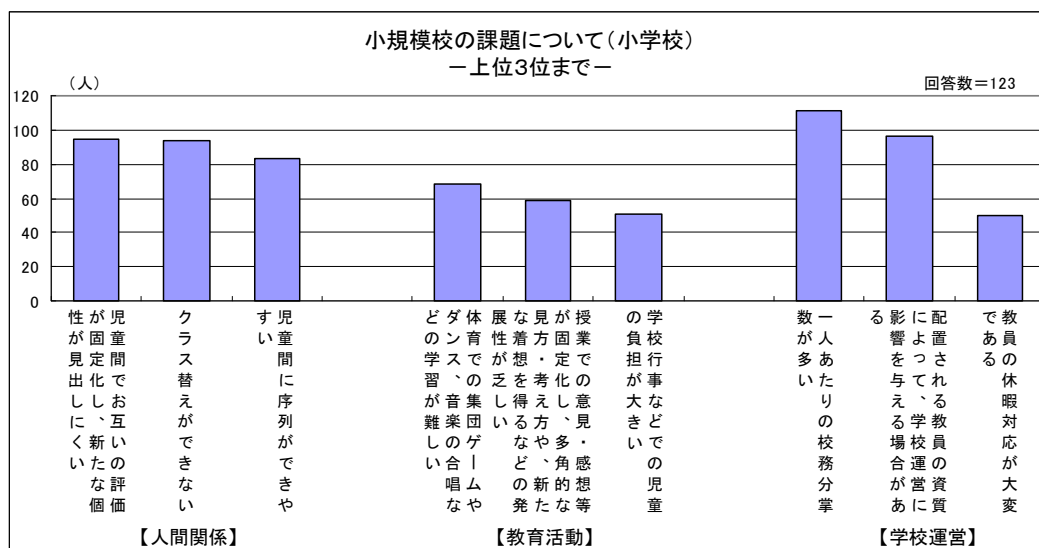
※ 当該学校において、ある教科の免許を持った教員がいない場合、その教科の免許を持たない教員が都道府県教育委員会の許可を得て、1 年間に限った免許を受け授業を行うこと。

される」が続いています。

また、こうした小規模校の課題のうち、12 学級(9 学級)以上の規模の学校であれば克服することができると考えられるものについては、人間関係面で小・中学校ともに「クラス替えができない」が克服できるという回答が最も多くなっています。

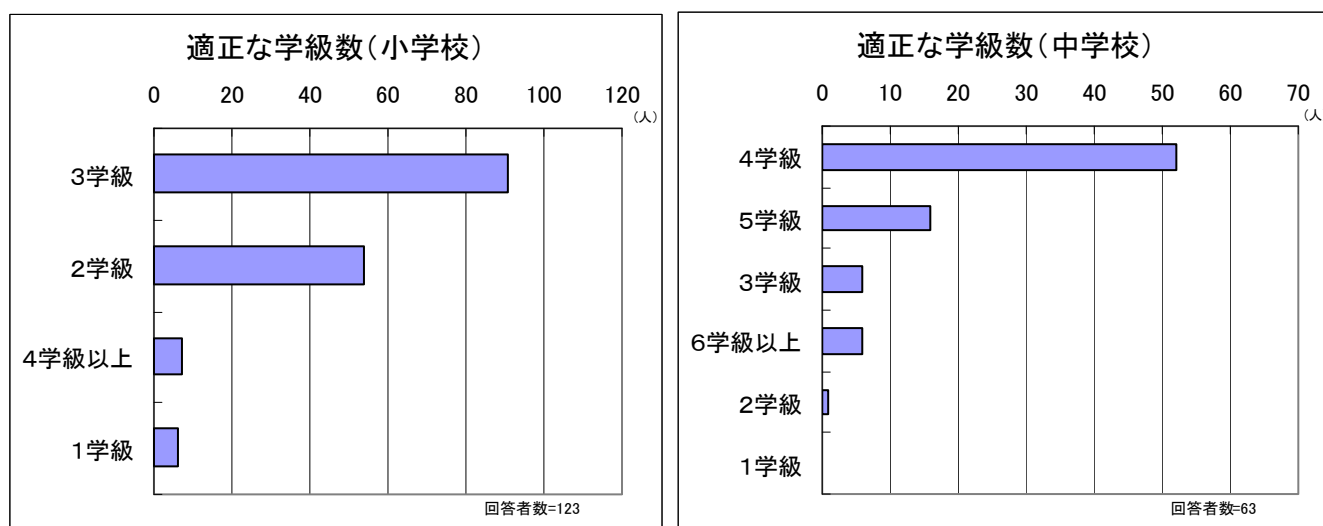
教育活動面では、小学校で「体育での集団ゲームやダンス、音楽の合唱などの学習が難しい」、中学校で「生徒が希望する部活動ができない」がそれぞれ克服できるという回答が最も多くなっています。

学校運営面では、小・中学校ともに「一人あたりの校務分掌数が多い」が克服できるという回答が最も多くなっています。(巻末参考資料参照)



### ③ 適正な学級数について

学校長が考える1学年あたりの適正な学級数について調査した結果、小学校では3学級が最も多く、次いで2学級が続いています。また、中学校では4学級が最も多く、次いで5学級となっています。



### ④ アンケート結果から

一般的に、小規模な学校では、児童生徒や教職員が皆お互いをよく知っており、アットホームな雰囲気の中で学校生活を送ることができたり、学校行事などでは学校全体が一体となって活動しやすいなどといったよさがあります。

その一方で、大勢の児童生徒による迫力ある運動会や学習発表会を行うこと、学年単位での活動に制約があることなど、課題もあります。

学校長のアンケート結果でも、よさについては「教師が児童生徒とのかかわりを持ちやすい」「全校が一体となった活動がしやすい」、課題については「集団ゲームや合唱などの学習が難しい」などが上位にきており、概ね同様の傾向が見られます。

こうした「よさ」や「課題」は、小規模校が持つ様々な側面であり、現在、それぞれの学校では、教職員や保護者、地域の方々の創意工夫により、そうした「よさ」を活かしながら、課題となることを補う努力をしています。

こうした取組みは、「特色ある学校づくり」を進めるうえでも大変重要なものとなっていますが、小規模校には学校独自の取組みだけでは克服することが難しい課題もあります。

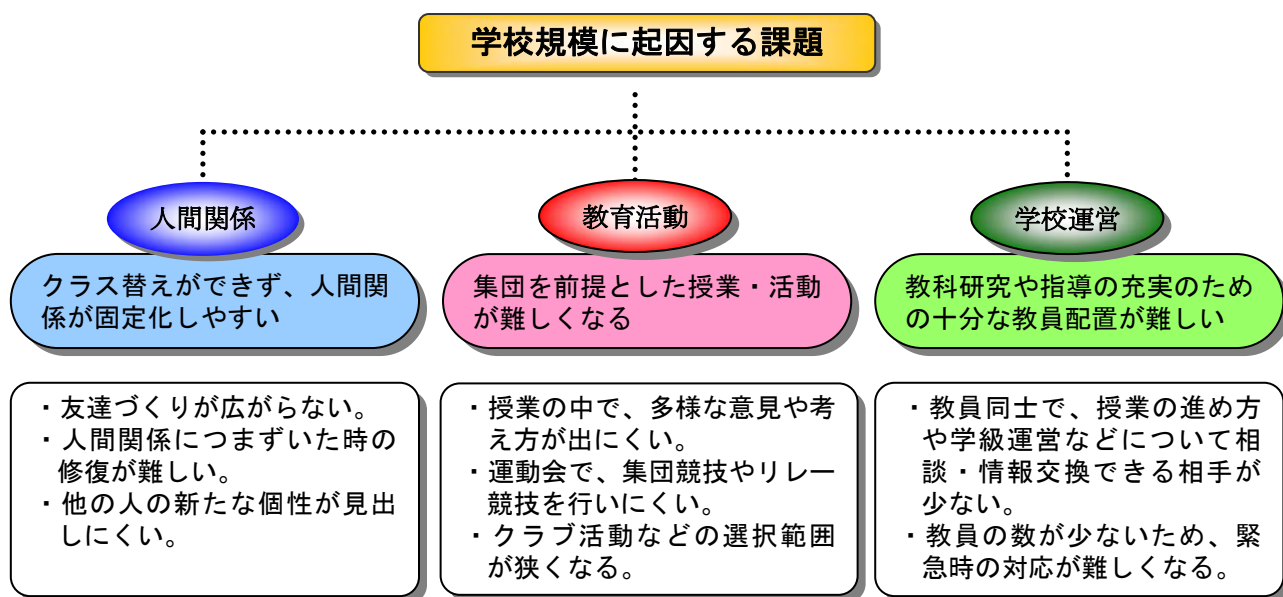
## (2) 学校規模に起因する課題

例えば、1学年に1学級（単学級）しかなければ、クラス替えを行うことはできません。この場合、入学から卒業まで同じ人間関係が続くことになり、知らず知らずのうちに児童生徒の間で互いの評価の固定化や、順番付けがされてしまうなどの可能性があります。

また、学校にはグループ別学習や部活動など、一定規模の集団があることにより大きな効果が得られる教育活動もたくさんあります。しかし、小規模校ではこれらについても、十分に行うことが難しくなります。

加えて、教員の数については、法令により学級数に応じて標準人員数が定められている関係から、教員間で教科に関する研究などを行うのに十分な教員数を確保し、学習指導面で充実を図ることが難しくなります。

これらは、学校の規模そのものが原因となって起きる課題であるため、小規模校のままで解決することは大変困難です。

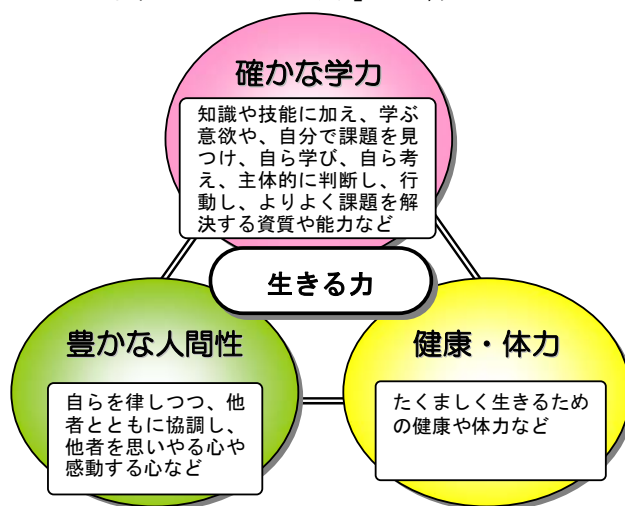


### Ⅲ 一定規模確保の必要性

#### 1 学校の役割

学習指導要領※の理念は、児童生徒に「確かな学力」「豊かな人間性」「健康・体力」をバランス良く身に付けさせることにより、変化の激しいこれからの社会を生き抜くために必要な「生きる力」を育むことをねらいとしています。

この「生きる力」を育むためには、基礎的・基本的な知識・技能はもちろん、児童生徒が、様々な意見や考え方を持った仲間と議論することや交流することなどを通して、思考力や判断力、表現力を身に付けたり、多様な人間関係の中でも他者と協調できる社会性を身に付けていくことも大変重要です。



学校は、児童生徒に対して、授業を始めとした教育活動や日常の様々な学校生活を通し、この「生きる力」を育てていくという役割を担っていますが、小規模な学校では規模に起因する課題があるため、その役割を十全に果たすことが難しくなります。

そのため、根本的な原因である学校の規模を一定の大きさにすることによって課題の解消を図り、小規模校の教育環境を充実させることが必要になります。

#### 2 実現すべき教育環境

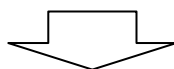
学校として一定の規模を確保することにより、以下のような教育環境を実現し、すべての学校が一定の環境のもとで、学校が果たすべき役割である教育活動を十分に行えるようにしていかなければなりません。

また、そうした教育環境を実現することによって、児童生徒の出会いの機会が増えることによる人間関係面での効果や、様々な大きさのグループによる授業やより大きな集団での学校行事が可能となることによる教育活動面での効果、さらには、教員間で相互に相談や意見交換がしやすくなることによる学校運営面での効果など、様々な効果が期待できます。

※ 教育基本法が掲げる教育の機会均等を実現するために、全国のどこにいても一定水準の教育が受けられるよう、学校がカリキュラムを編成する際の基準として文部科学省が告示しているもの。

### 実現すべき教育環境

- ・ 児童生徒間、児童生徒と教員間、それぞれにおける多様な人間関係を通し、互いに理解を深め、励まし合い、時には競い合うことで向上しながら社会性を培っていくことができること。
- ・ グループ別学習や部活動、学校行事など、一定規模の集団を前提とする教育活動を支障なく成立させることができること。
- ・ 教科研究や指導の充実を図るため、教員間で情報交換などを行うことができるよう、教科ごとに複数の教員が配置されていること。



### 期待される効果

出会いの機会が広がることで、多くの友人をつくり、様々な刺激のなかから、子供たちをより豊かに成長させることができます。

集団での学校行事や多くの部活動の設置が可能となることで、様々な仲間たちと力を合わせる喜びや達成感がより大きくなり、子供たちの新たな可能性を広げることができます。

教員間で指導法を相談したり、相互に意見交換をする機会を増やしたりすることで、これまで以上に学習指導や内容の充実を図ることができます。

## IV 一定規模の基準と考え方

### 1 学級数

一定規模の基準として、検討委員会からは小学校 12 学級以上、中学校 9 学級以上という考え方が示されました。

教育委員会としても、以下の 2 点から、検討委員会における基準が妥当であると判断しました。

- ①小・中学校ともに、少なくとも、各学年でクラス替えによる児童生徒間の交流が可能となるよう、1 学年複数学級あることが望ましいこと。
- ②教科ごとの専門性が高まる中学校については、①に加え、指導の充実を図るうえでも、5 教科（国語・数学・理科・社会・英語）には教科ごとに複数教員、実技系教科（音楽・美術・保健体育・技術家庭）にも教科ごとに教員が確保されるような体制が望ましいと考えられること。

#### 学級数の基準

小学校：12 学級以上が必要（各学年でクラス替えができる）

中学校：9 学級以上が必要（クラス替えに加え、教員配置を考慮）

### 2 通学距離

通学距離の基準として、検討委員会からは小学校概ね 4 km 以内、中学校概ね 6 km 以内と示されました。

通学距離の基準設定に際し、検討委員会では、通学距離は短いほどよいと言えるが、その反面、一定規模の確保が難しくなることや、本市では、特別区や他の政令指定都市よりも学区が比較的広く、統合等を行うとさらに広がってしまう可能性があることなどを考え合わせ、当面は法令に準ずることが妥当であるとしています。

教育委員会では、こうした検討委員会の考え方のほか、この基準が、学校の分離新設を行う際や、既存の通学補助制度を適用する際の目安としていくことなどから、検討委員会と同様の通学距離が妥当であると判断しました。

#### 通学距離の基準

小学校：概ね 4 km 以内

中学校：概ね 6 km 以内



### 3 一定規模を確保する際の手法

一定規模を確保する際の手法として、検討委員会の最終報告では統合または学区修正を示しています。このうち統合については、①一定規模の基準に満たない学校が複数隣接している場合 ②隣接する一定規模の学校と統合しても大規模校※になる恐れがない場合としています。

また、学区修正については、隣接校が大規模となっている場合に有効であるとしています。

教育委員会でも、こうした一定規模確保を図るための手法として、検討委員会と同様、統合と学区修正の2つを考えています。

#### 一定規模を確保する際の手法

- 統 合** : 一定規模の基準に満たない学校が複数隣接している場合  
: 隣接する一定規模の学校と統合しても大規模校になる恐れがない場合
- 学区修正** : 一定規模の基準に満たない学校と大規模校が隣接している場合

---

※ ここで言う大規模校とは、25 学級以上の学校を指す。



## V 実施方針の策定について

今回策定した基本方針の基準や考え方に基づき、対象となる学校ごとの方策について実施方針を策定します。

実施方針では、検討委員会の最終報告で対象とされた各学校について、児童生徒数や通学距離、地域の状況等を改めて検証します。

そのうえで、一定規模確保に向けた具体的な取組みの進め方や、統合による一定規模確保が難しいと判断された学校における教育環境向上のための方策の検討などについて、教育委員会としての考え方を提示します。

## VI 統合に向けた話し合いを進めるにあたって

これまで教育委員会では、学校、保護者、地域がともに連携し、協力しながら、次代を担う子供たちを育てていくという考え方を基本に据え、各種事業に取り組んできており、各学校では、保護者や地域の皆様の協力、支援の下で日々の教育活動が成り立っています。また、学校は、子供が通うまでは交流がなかった地域の人々が、学校を通じて関係を深め、地域活動への参加といった広がりへのきっかけを生む場ともなっています。

したがって、地域から学校がなくなるといった学校統合は、当然のことながら保護者や地域の皆様の理解があってはじめて実現するものです。

そのためには、教育委員会の考え方について、保護者や地域の皆様にしっかりと説明し、「将来を担う子供のため」という視点から十分に話し合うとともに、地域コミュニティにおける学校のあり方についてのご意見、ご要望を真摯に受けとめていきたいと考えています。

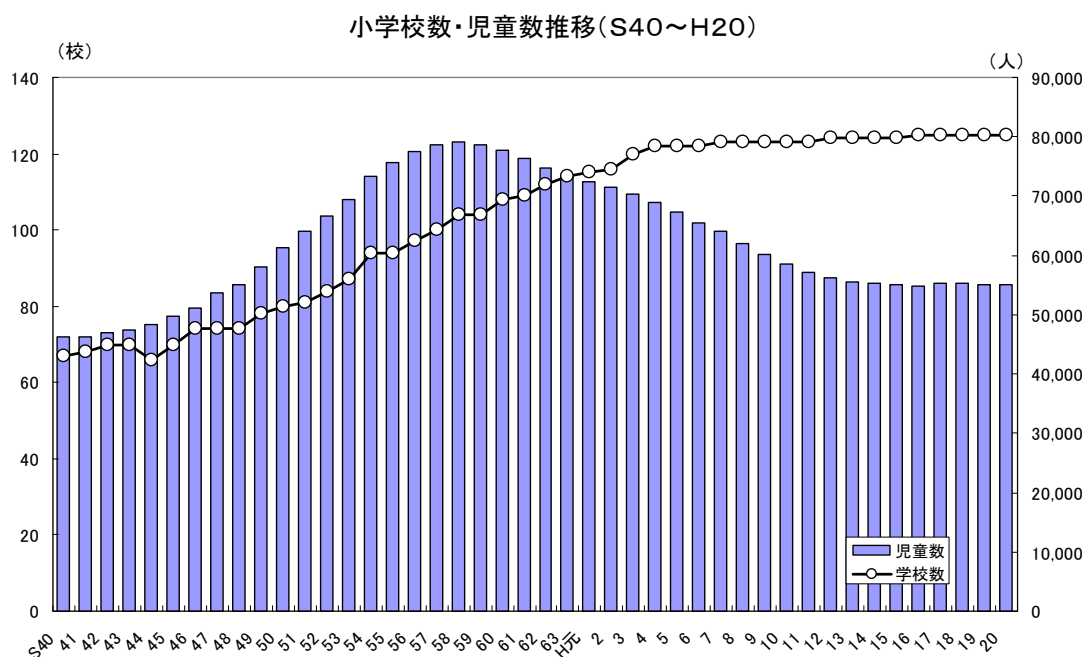
新しく生まれる学校が、これまでと同様に地域から愛され、支えられる存在となるよう、保護者や地域の皆様と共に考えていきたいと思います。



# 参 考 資 料

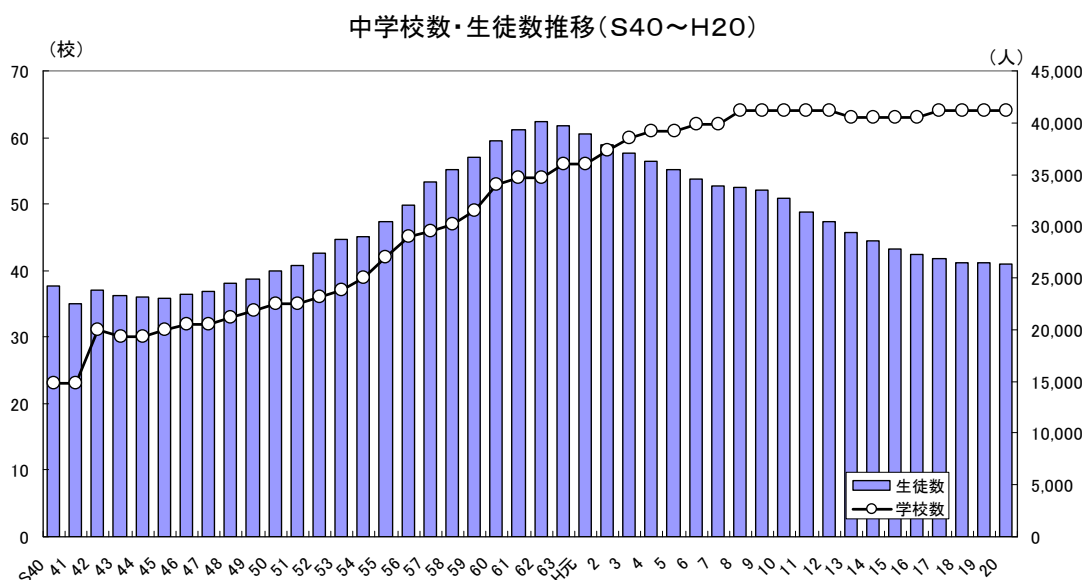
小学校数及び児童数の推移	-----	16
中学校数及び生徒数の推移	-----	16
小・中学校の学級数別内訳	-----	17
学校規模別小学校数の推移	-----	18
学校規模別中学校数の推移	-----	19
学校長アンケート結果	-----	20

## 小学校数及び児童数の推移



「学校統計要覧」(宮城県)より  
 ※合併以前の旧泉市、旧宮城町、旧秋保町の数値含む

## 中学校数及び生徒数の推移



「学校統計要覧」(宮城県)より  
 ※合併以前の旧泉市、旧宮城町、旧秋保町の数値含む

小・中学校の学級数別内訳 (H20.5.1)

【小 学 校】

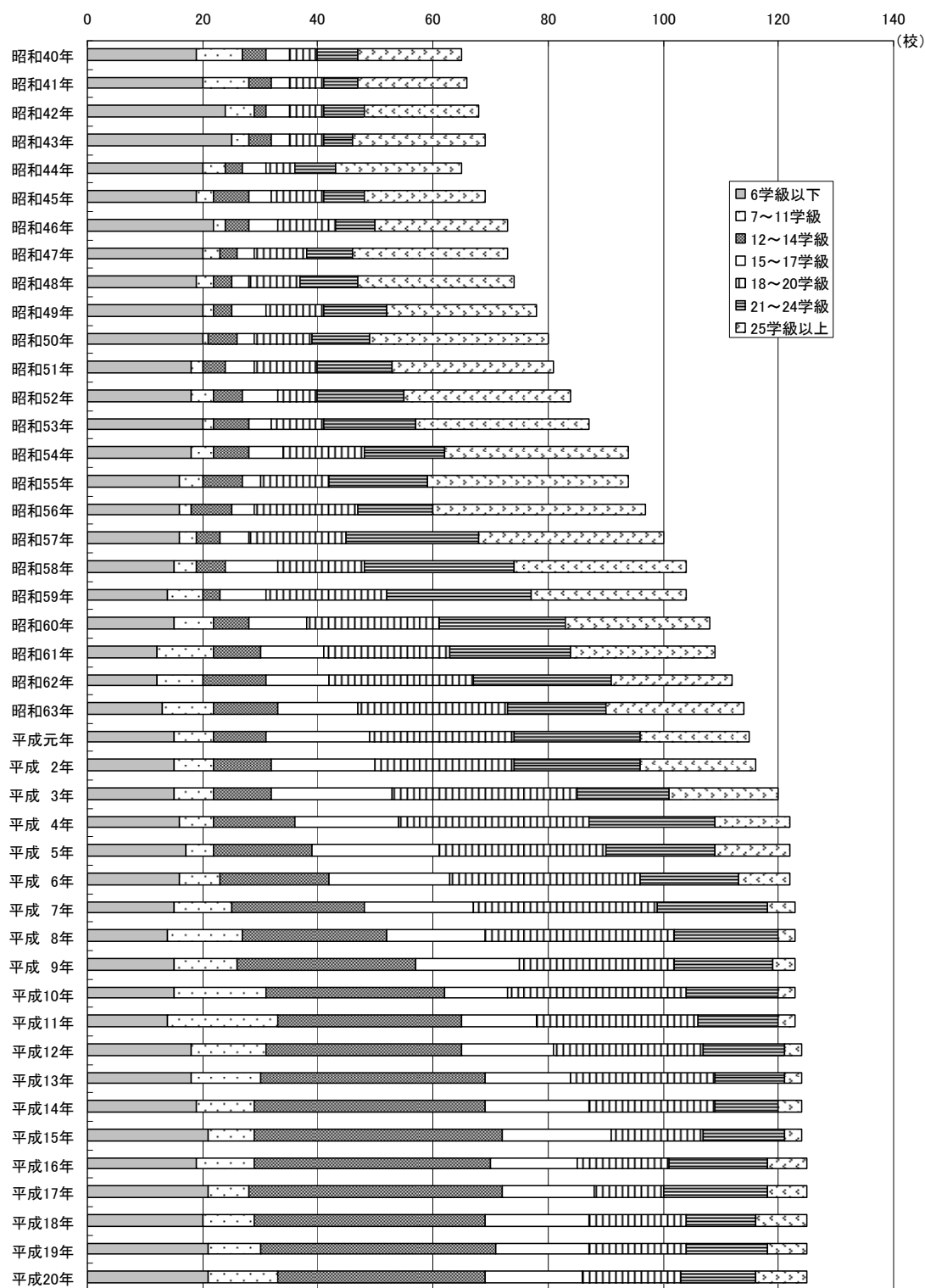
【中学校】

[illegible]

※ 特別支援学級・児童生徒を除く。  
 ※ 木町通小及び第二中の東北大学病院院内分校の児童生徒数を除く。  
 ※ 人來田小及び人來田中の旗立分教室の児童生徒数を除く。

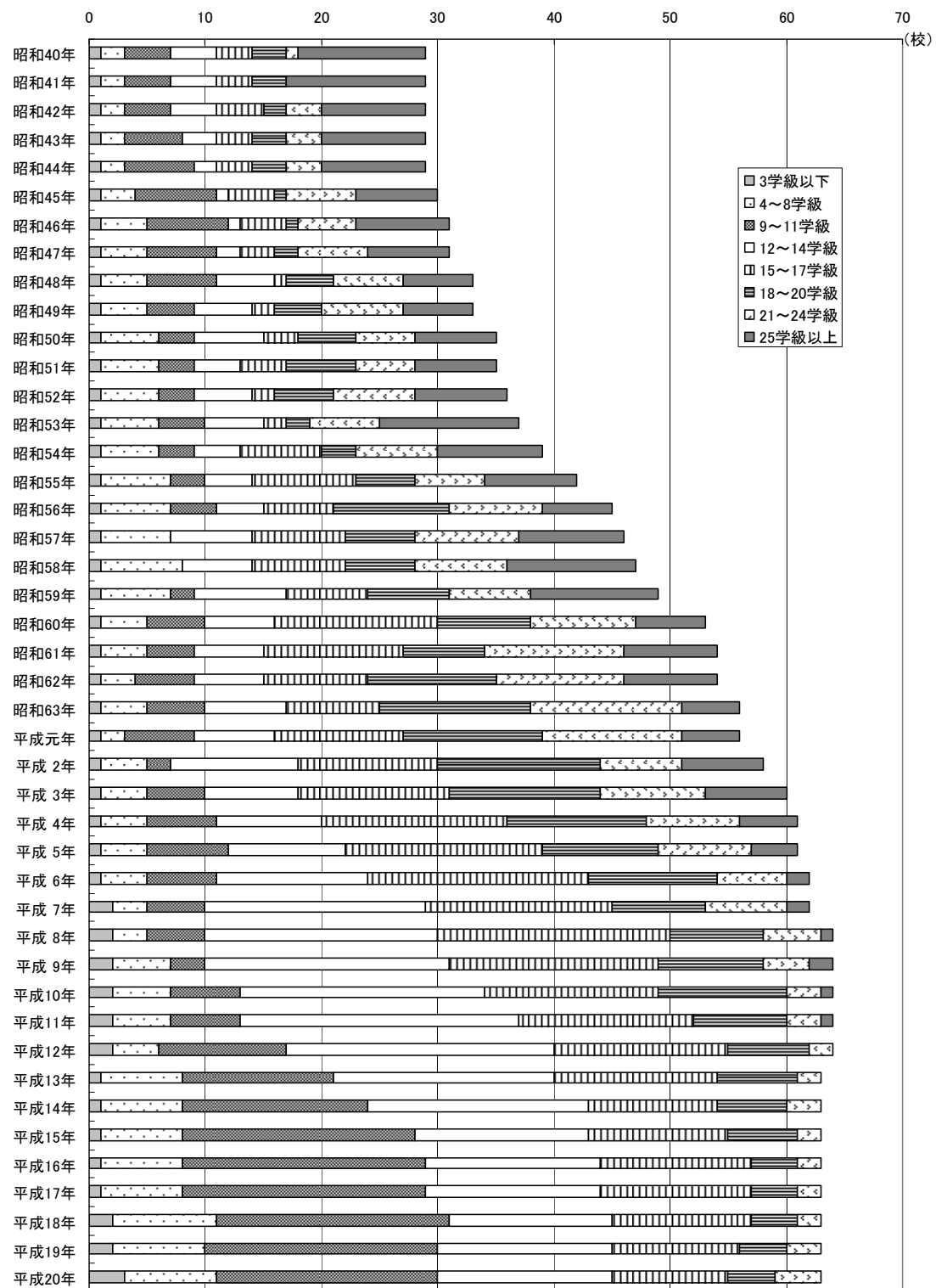
資料：仙台市教育委員会作成

## 学校規模別小学校数の推移（S40～H20）



「学校統計要覧」（宮城県）より  
※合併以前の旧泉市、旧宮城町、旧秋保町の数値含む

## 学校規模別中学校数の推移（S40～H20）



「学校統計要覧」（宮城県）より  
※合併以前の旧泉市、旧宮城  
町、旧秋保町の数値含む

## 学校長アンケート結果

回答数 (%)

123 100.0

### 【小学校】

1. 小規模校(12学級未満)での勤務経験	a あり	107	87.0
	b なし	15	12.2

2. 小規模校(12学級未満)の良さであると思われる事項	(1)人間関係、集団生活	d 教師が全校児童とかかわりを持ちやすい	120	97.6
		c 児童が学年を越えて交流することができる	113	91.9
		a 上級生が下級生の面倒をみる	98	79.7
		b 児童がお互いを深く知ることができる	79	64.2
		g 非行や問題行動が少ない	48	39.0
		e 児童が素直で純粋に育つ	34	27.6
		f 児童間あるいは教師と児童間の関係が悪化した場合の修復がしやすい	16	13.0
	(2)教育活動	c 全校一体となった活動がしやすい	113	91.9
		f 教室・体育館・校庭などが余裕をもって活用できる	101	82.1
		a 児童一人一人に合わせたきめ細かな指導ができる	97	78.9
		h 家庭や地域との連携が図りやすい	83	67.5
		d 授業での発言機会が多い	72	58.5
		e 遠足や野外授業などで活動しやすい	64	52.0
		g 運動会などでの出番が多い	51	41.5
		b 教材・教具の一人あたりの割り当てが多い	47	38.2
	(3)学校運営	e 学校全体が、教職員・児童・保護者（地域）を含め一丸となりやすい	105	85.4
		c 教員間での意思疎通が図りやすい	98	79.7
		b 校長の教育方針に基づく指導が徹底されやすい	75	61.0
		d 学校行事等の企画・実施を効率よく行うことができる	59	48.0
		a 校務分掌の一つあたりの業務量が少ない	26	21.1

### 2. の回答数

3. 12学級以上の規模の学校でも工夫次第ではそうした良さは出せると思われるもの	(1)人間関係、集団生活	c 児童が学年を越えて交流することができる	113	91	80.5
		a 上級生が下級生の面倒をみる	98	89	90.8
		b 児童がお互いを深く知ることができる	79	24	30.4
		e 児童が素直で純粋に育つ	34	17	50.0
		g 非行や問題行動が少ない	48	14	29.2
		d 教師が全校児童とかかわりを持ちやすい	120	12	10.0
		f 児童間あるいは教師と児童間の関係が悪化した場合の修復がしやすい	16	7	43.8
	(2)教育活動	a 児童一人一人に合わせたきめ細かな指導ができる	97	62	63.9
		h 家庭や地域との連携が図りやすい	83	46	55.4
		c 全校一体となった活動がしやすい	113	38	33.6
		d 授業での発言機会が多い	72	35	48.6
		e 遠足や野外授業などで活動しやすい	64	14	21.9
		b 教材・教具の一人あたりの割り当てが多い	47	3	6.4
		g 運動会などでの出番が多い	51	3	5.9
		f 教室・体育館・校庭などが余裕をもって活用できる	101	2	2.0
	(3)学校運営	c 教員間での意思疎通が図りやすい	98	45	45.9
		b 校長の教育方針に基づく指導が徹底されやすい	75	43	57.3
		e 学校全体が、教職員・児童・保護者（地域）を含め一丸となりやすい	105	38	36.2
		d 学校行事等の企画・実施を効率よく行うことができる	59	31	52.5
		a 校務分掌の一つあたりの業務量が少ない	26	5	19.2



4. 小規模校(12学級未満)の課題であると思われる事項	(1)人間関係、集団生活	e 児童間でお互いの評価が固定化し、新たな個性が見出しにくい	95	77.2
		a クラス替えができない	94	76.4
		f 児童間に序列がしやすい	83	67.5
		b 児童間での切磋琢磨が少ない	67	54.5
		d 他の児童からの刺激(行動や意見)が少ない	57	46.3
		g 児童間あるいは教師と児童間で関係が悪化した場合の修復が難しい	46	37.4
		i 多くの人の前では物怖じしてしまう	34	27.6
		c 集団生活に必要な社会性が身に付きにくい	16	13.0
		h 教師への依存性が高い	14	11.4
		j 向上心が乏しく積極性に欠ける	5	4.1
	(2)教育活動	c 体育での集団ゲームやダンス、音楽の合唱などの学習が難しい	68	55.3
		d 授業での意見・感想等が固定化し、多角的な見方・考え方や、新たな着想を得るなどの発展性が乏しい	59	48.0
		f 学校行事などでの児童の負担が大きい	51	41.5
		a 運動会などで多様な競技を行うことができない	41	33.3
		g 教員が出張等になると自習になることが多い	39	31.7
		b 運動会で、競技を見る児童がいらないため張り合いがない	10	8.1
		e 遠足や野外授業などでの集団活動による教育効果が得にくい	6	4.9
		h 学習意欲を高めるような教育活動が行いにくい	5	4.1
	(3)学校運営	a 一人あたりの校務分掌数が多い	111	90.2
		h 配置される教員の資質によって、学校運営に影響を与える場合がある	96	78.0
		f 教員の休暇対応が大変である	50	40.7
		g 習熟度別学習などに対応した指導体制を組むことが難しい	47	38.2
		c 教科研究会や出張などに参加しづらい	40	32.5
		i P T A 活動などでの保護者の負担が大きい	36	29.3
		b 教員相互での情報交換や共同研究を行う機会が少ない	14	11.4
		d 教員の指導力向上を図りづらい	12	9.8

#### 4. の回答数

5. 12学級以上の規模の学校であれば克服できると思われるもの	(1)人間関係、集団生活	a クラス替えができない	94	86	91.5
		e 児童間でお互いの評価が固定化し、新たな個性が見出しにくい	95	68	71.6
		f 児童間に序列がしやすい	83	60	72.3
		b 児童間での切磋琢磨が少ない	67	55	82.1
		d 他の児童からの刺激(行動や意見)が少ない	57	50	87.7
		g 児童間あるいは教師と児童間で関係が悪化した場合の修復が難しい	46	28	60.9
		i 多くの人の前では物怖じしてしまう	34	18	52.9
		c 集団生活に必要な社会性が身に付きにくい	16	16	100.0
		h 教師への依存性が高い	14	11	78.6
		j 向上心が乏しく積極性に欠ける	5	4	80.0
	(2)教育活動	c 体育での集団ゲームやダンス、音楽の合唱などの学習が難しい	68	63	92.6
		f 学校行事などでの児童の負担が大きい	51	47	92.2
		d 授業での意見・感想等が固定化し、多角的な見方・考え方や、新たな着想を得るなどの発展性が乏しい	59	45	76.3
		a 運動会などで多様な競技を行うことができない	41	39	95.1
		g 教員が出張等になると自習になることが多い	39	25	64.1
		b 運動会で、競技を見る児童がいらないため張り合いがない	10	10	100.0
		e 遠足や野外授業などでの集団活動による教育効果が得にくい	6	4	66.7
		h 学習意欲を高めるような教育活動が行いにくい	5	3	60.0
	(3)学校運営	a 一人あたりの校務分掌数が多い	111	105	94.6
		g 習熟度別学習などに対応した指導体制を組むことが難しい	47	38	80.9
		h 配置される教員の資質によって、学校運営に影響を与える場合がある	96	34	35.4
		c 教科研究会や出張などに参加しづらい	40	29	72.5
		f 教員の休暇対応が大変である	50	27	54.0
		i P T A 活動などでの保護者の負担が大きい	36	25	69.4
		b 教員相互での情報交換や共同研究を行う機会が少ない	14	12	85.7
		d 教員の指導力向上を図りづらい	12	5	41.7

6. 学校の適正な規模は、1学年何学級か	c 3学級	91	74.0
	b 2学級	54	43.9
	d 4学級以上	7	5.7
	a 1学級	6	4.9

回答数 (%)

63	100.0
----	-------

【中学校】

1. 小規模校(9学級未満)での勤務経験	a あり	40	63.5
	b なし	22	34.9

2. 小規模校(9学級未満)の良さであると思われる事項	(1)人間関係、集団生活	d 教師が全校生徒とかかわりを持ちやすい	63	100.0
		c 生徒が学年を越えて交流することができる	52	82.5
		b 生徒がお互いを深く知ることができる	42	66.7
		a 上級生が下級生の面倒をみる	31	49.2
		g 非行や問題行動が少ない	15	23.8
		e 生徒が素直で純粋に育つ	11	17.5
		f 生徒間のあるいは教師と生徒間の関係が悪化した場合の修復がし易い	4	6.3
	(2)教育活動	c 全校一体となった活動がしやすい	53	84.1
		f 教室・体育館・校庭などが余裕をもって活用できる	47	74.6
		a 生徒一人一人に合わせたきめ細かな指導ができる	46	73.0
		e 野外授業や修学旅行などで活動しやすい	32	50.8
		i 家庭や地域との連携が図りやすい	32	50.8
		d 授業での発言機会が多い	21	33.3
		g 運動会(体育祭)などでの出番が多い	19	30.2
		b 教材・教具の一人あたりの割り当てが多い	14	22.2
		h 部活動で活躍の場をつくりやすい	13	20.6
	(3)学校運営	c 教員間での意思疎通が図りやすい	54	85.7
		e 学校全体が、教職員・生徒・保護者(地域)を含め一丸となりやすい	51	81.0
		b 校長の教育方針に基づく指導が徹底されやすい	36	57.1
		d 学校行事等の企画・実施を効率よく行うことができる	18	28.6
		a 校務分掌の一つあたりの業務量が少ない	7	11.1

2. の回答数

3. 9学級以上の規模の学校でも工夫次第ではそうした良さは出せると思われるもの	(1)人間関係、集団生活	c 生徒が学年を越えて交流することができる	52	41	78.8
		a 上級生が下級生の面倒をみる	31	24	77.4
		d 教師が全校生徒とかかわりを持ちやすい	63	8	12.7
		b 生徒がお互いを深く知ることができる	42	7	16.7
		e 生徒が素直で純粋に育つ	11	7	63.6
		g 非行や問題行動が少ない	15	6	40.0
		f 生徒間のあるいは教師と生徒間の関係が悪化した場合の修復がし易い	4	1	25.0
	(2)教育活動	a 生徒一人一人に合わせたきめ細かな指導ができる	46	26	56.5
		c 全校一体となった活動がしやすい	53	22	41.5
		i 家庭や地域との連携が図りやすい	32	12	37.5
		d 授業での発言機会が多い	21	11	52.4
		e 野外授業や修学旅行などで活動しやすい	32	7	21.9
		h 部活動で活躍の場をつくりやすい	13	6	46.2
		g 運動会(体育祭)などでの出番が多い	19	3	15.8
		b 教材・教具の一人あたりの割り当てが多い	14	1	7.1
		f 教室・体育館・校庭などが余裕をもって活用できる	47	1	2.1
	(3)学校運営	c 教員間での意思疎通が図りやすい	54	27	50.0
		b 校長の教育方針に基づく指導が徹底されやすい	36	20	55.6
		e 学校全体が、教職員・生徒・保護者(地域)を含め一丸となりやすい	51	19	37.3
		d 学校行事等の企画・実施を効率よく行うことができる	18	10	55.6
		a 校務分掌の一つあたりの業務量が少ない	7	3	42.9

4. 小規模校 (9学級未満) の課題である と思われる事項	(1)人間関係、集団生活	a 生徒の適性や人間関係を考慮したクラス替えができない	48	76.2
		b 生徒間での切磋琢磨が少ない	38	60.3
		e 生徒間でお互いの評価が固定化し、新たな個性が見出しにくい	36	57.1
		f 生徒間に序列がしやすい	34	54.0
		d 他の生徒からの刺激（行動や意見）が少ない	32	50.8
		g 生徒間あるいは教師と生徒間の関係が悪化した場合の修復が難しい	24	38.1
		c 集団生活に必要な社会性が身に付きにくい	8	12.7
		i 多くの人の前では物怖じしてしまう	6	9.5
		j 向上心が乏しく積極性に欠ける	4	6.3
		h 教師への依存性が高い	2	3.2
	(2)教育活動	a 生徒が希望する部活動ができない	58	92.1
		g 教員が出張等になると自習になることが多い	33	52.4
		c 体育での集団ゲームやダンス、音楽の合唱などの学習が難しい	25	39.7
		f 学校行事などでの生徒の負担が大きい	21	33.3
		b 運動会（体育祭）などでの盛り上げりに欠ける	18	28.6
		d 授業での意見・感想等が固定化し、多角的な見方・考え方や新たな着想を得るなどの発展性が乏しい	10	15.9
		e 野外授業や修学旅行などでの集団活動による教育効果が得にくい	1	1.6
		h 学習意欲を高めるような教育活動が行いにくい	1	1.6
	(3)学校運営	a 一人あたりの校務分掌数が多い	55	87.3
		e 免外指導を余儀なくされる	54	85.7
		h 配置される教員の資質によって、学校運営に影響を与える場合がある	51	81.0
		f 教員の休暇対応が大変である	30	47.6
		c 教科研究会や出張などに参加しづらい	28	44.4
		i P T A 活動などでの保護者の負担が大きい	16	25.4
		b 教員相互での情報交換や共同研究を行う機会が少ない	14	22.2
		g 習熟度別学習などに対応した指導体制を組むことが難しい	9	14.3
		d 教員の指導力向上を図りづらい	8	12.7

#### 4. の回答数

5. 9学級以上の規模の学校であれば克服できると 思われるもの	(1)人間関係、集団生活	a 生徒の適性や人間関係を十分考慮したクラス替えができない	48	44	91.7
		d 他の生徒からの刺激（行動や意見）が少ない	32	24	75.0
		b 生徒間での切磋琢磨が少ない	38	23	60.5
		e 生徒間でお互いの評価が固定化し、新たな個性が見出しにくい	36	20	55.6
		f 生徒間に序列がしやすい	34	19	55.9
		g 生徒間あるいは教師と生徒間の関係が悪化した場合の修復が難しい	24	13	54.2
		c 集団生活に必要な社会性が身に付きにくい	8	5	62.5
		j 向上心が乏しく積極性に欠ける	4	3	75.0
		i 多くの人の前では物怖じしてしまう	6	2	33.3
		h 教師への依存性が高い	2	1	50.0
	(2)教育活動	a 生徒が希望する部活動ができない	58	49	84.5
		g 教員が出張等になると自習になることが多い	33	27	81.8
		c 体育での集団ゲームやダンス、音楽の合唱などの学習が難しい	25	23	92.0
		f 学校行事などでの生徒の負担が大きい	21	17	81.0
		b 運動会（体育祭）などでの盛り上げりに欠ける	18	13	72.2
		d 授業での意見・感想等が固定化し、多角的な見方・考え方や新たな着想を得るなどの発展性が乏しい	10	5	50.0
		e 野外授業や修学旅行などでの集団活動による教育効果が得にくい	1	1	100.0
		h 学習意欲を高めるような教育活動が行いにくい	1	1	100.0
	(3)学校運営	a 一人あたりの校務分掌数が多い	55	47	85.5
		e 免外指導を余儀なくされる	54	44	81.5
		f 教員の休暇対応が大変である	30	20	66.7
		c 教科研究会や出張などに参加しづらい	28	17	60.7
		h 配置される教員の資質によって、学校運営に影響を与える場合がある	51	16	31.4
		b 教員相互での情報交換や共同研究を行う機会が少ない	14	12	85.7
		i P T A 活動などでの保護者の負担が大きい	16	10	62.5
		g 習熟度別学習などに対応した指導体制を組むことが難しい	9	8	88.9
		d 教員の指導力向上を図りづらい	8	5	62.5

6. 学校の適正な規模は、1 学年何学級か	d 4学級	52	82.5
	e 5学級	16	25.4
	c 3学級	6	9.5
	f 6学級以上	6	9.5
	b 2学級	1	1.6
	a 1学級	0	0.0

## 学校長アンケートにおける自由意見

### 【小学校】

小規模校のよさ	人間関係	<p>【人間関係が親密】 小規模校は学校全体がアットホームで、児童同士、児童・教員間の関係が親密である場合が多いことが利点である。(類似意見 3 件)</p> <p>【一人一人を把握できる】 職員全体で子供一人一人が把握でき、複数の目で対応ができる。(類似意見 2 件)</p> <p>【指導上の課題が少ない】 児童の相互理解や相互支援が図られ、思いやりの心や教えあいが自然にでき、人間関係のトラブルや問題行動が少ない。(ほかに類似意見 2 件)</p> <p>【その他】 子供たちの気質が穏やかである。(ほか 1 件)</p>
	教育活動	<p>【個別指導が行いやすい】 児童の個別化が図りやすく、「個」に応じた指導ができる。(類似意見 5 件)</p> <p>【全校一体となった活動】 全校単位の行事であっても、教員同士の意思の疎通があるので、スムーズであり、学年を越えての交流をも促進する良い結果に繋がった。(類似意見 2 件)</p> <p>【地域と一体となった活動】 防災訓練、集団下校等、地域と一体となった取組みがしやすく、徹底しやすかった。(類似意見 2 件)</p> <p>【活躍の場が多い】 一人一人の児童の活躍の場が多く設けられる。(類似意見 1 件)</p> <p>【その他】 「たて割」の活動を取り入れ易い。(ほか 3 件)</p>
	学校運営	<p>【地域との連携】 地域全体が自分たちの学校であるという意識が強く、学校や子ども達を見守り、支えてくれている利点は無視できない。(類似意見 6 件)</p> <p>【教師の意識】 教師に学校全体を考えた発言、行動が多くみられた。一人一人の意識、責任感も強いと感じられた。(類似意見 2 件)</p> <p>【教職員の機動力】 行事等の変更がスムーズに行え、会議がいつでも必要な時に開催できた。(類似意見 2 件)</p> <p>【全校児童への共通理解】 欠席した児童について、学年を越えて全職員が関心を持つとともに、心配してあげることができる。(類似意見 3 件)</p>
小規模校の課題	人間関係	<p>【序列化・固定化】 固定化された人間関係が 6 年間続くことは、心身の健全な成長を促す上で決して好ましくない。一度構築された人間関係の序列は、日常の学校生活で否応なく影を落とす。(類似意見 9 件)</p> <p>【関係悪化の際の修復】 関係がこじれたり悪化したりした場合、修復に時間を要し、転校、転勤せざるを得ない場合もある。(類似意見 3 件)</p> <p>【消極的】 新しい人間関係に対して消極的になったり、可能性に挑戦しながら自分を高めていくといった積極的な生き方を育むことも一般的に言うて難しいように思う。(類似意見 1 件)</p> <p>【その他】 切磋琢磨する機会が少なく、一般的に児童も教師も無意識のうちに自分たちのレベルを限定してしまっている感じがある。(ほか 5 件)</p>
	教育活動	<p>【序列化】 子供たちの間に暗黙の序列関係ができており、発言する児童等が固定されてしまうことがある。(類似意見 2 件)</p> <p>【教員の指導】 指導の仕方が担任依存になってしまうとともに、担任の指導も閉鎖的になりやすい。(類似意見 1 件)</p> <p>【費用負担】 遠足や修学旅行、野外活動等の交通費の児童一人当たりの負担金額が高い。(類似意見 1 件)</p> <p>【その他】 ボール運動などは、チームが固定化してしまい、盛り上がり欠ける面があった。</p>
	学校運営	<p>【教職員の人間関係】 教員相互の関係がうまく機能しないと、それぞれの学年が「学級王国」になってしまう危険性がある。(類似意見 3 件)</p> <p>【教師の質】 1 学年 2 学級以上ないと、同学年の教師で相談することができず、結果的に教師の質がその学年の指導に大きな影響を及ぼす。(類似意見 5 件)</p> <p>【校務分掌量】 一人当たりの校務分掌量が多いことと、一緒に教材研究ができる仲間がいなことが小規模校の何よりの課題である。(類似意見 3 件)</p> <p>【その他】 一人の教員が学年行事の全てを企画するため、マンネリ化と創造性に欠ける面が出てくる。(ほか 2 件)</p>

統合に対する考え方	推進すべき	<p>【社会性の涵養】 集団の中で学んでいく社会性を育てることが重要。学習面でも多様な考え方が出てくる環境で学力が伸びることも考えられる。(類似意見 3 件)</p> <p>【学級の人数】 学校にはある程度的人数が必要であると考えられ、特に 1 学年 10～20 人未満の学校は対応が必要である。(類似意見 2 件)</p> <p>【教師の人数】 教師が子供と向き合う時間を確保し、教材研究・授業研究を深めるためには、一定規模に集約し、加配人数を増やしていくことが効果的と考える。(類似意見 3 件)</p> <p>【地域性】 新興住宅地の学校は、統合しても大きな問題はないと思う。(類似意見 1 件)</p> <p>【その他】 小規模校にはそれなりのよさがたくさんあるが、これまでの経験の中で、3 学級ずつの学校に勤務した時が最も学校に活気があったように思う。(ほか 2 件)</p>
	慎重に検討すべき	<p>【地域への影響】 地域コミュニティの場としての必要性も考慮すべきであり、小規模校という理由で地域から学校がなくなる事については疑問が残る。(類似意見 9 件)</p> <p>【学校規模】 集団として 1 学年 30 人程度いれば、児童間の切磋琢磨や小集団活動は可能。(類似意見 2 件)</p> <p>【教職員の創意工夫】 小規模校の教育的見地からのデメリットについては、教職員の創意工夫により改善し、補うことは可能。(類似意見 4 件)</p> <p>【指導体制】 全職員が全児童を対象にして指導に関わることができる体制が望ましいので、児童一人一人がよく見える規模の方がよいと考える。(類似意見 1 件)</p> <p>【メリットの継続】 一定規模を確保することにより、小規模校の課題は何とか解決できるが、小規模校の良さを引き継ぐのは難しいという印象がある。(類似意見 2 件)</p> <p>【その他】 小学校においては、豊かな情操・感受性や自らの居場所・安心感を育みたい。小規模校においてできること、大・中規模校だからできることの様々な面があってもよいのではないかな。</p>
	その他	<p>【学校規模】 学校規模に適正があるとは思えない。(類似意見 6 件)</p> <p>【教員の質】 教員が学校運営、教育活動で「困難さ」を感じるのは、学校規模ではなく、どのような教師集団で、どのような子供・保護者がいるのかが第一義的だと思う。(類似意見 5 件)</p> <p>【他の手法】 廃校にするのではなく、学区の選択の幅を広げて、学習の質があがるよう工夫すべきである。(類似意見 4 件)</p> <p>【地域とのかかわり】 一学年の学級数は単学級よりも複数学級の方が望ましいと考えるが、学校と地域とのかかわりや、地域の特性等もあるので、適正規模については難しい。(類似意見 2 件)</p> <p>【適正化をすすめるにあたって】 学校統合を図る場合に、保護者の多くは、経済優先・効率化優先のためのこじつけと受け取っていると思う。(類似意見 4 件)</p> <p>【その他】 小規模校を減らすことは、私立学校の望むところではないかな。(ほか 2 件)</p>

## 【中学校】

小規模校のよさ	人間関係	<p>【指導体制】 全校生徒の性格や家庭事情も知っているのも、親身になってきめ細かい指導がしやすい。(類似意見 1 件)</p> <p>【生徒とのかかわり】 多くの生徒に声をかけやすい。</p>
	教育活動	<p>【活動のしやすさ】 小学校から同じ学校で生活をしてきているので、学習活動や部活動においてスムーズに人間関係を築いていけることが多く、連帯感をもって活動しやすい。(類似意見 2 件)</p> <p>【活躍の場】 各種行事において、児童・生徒一人一人の活躍の場がある。</p> <p>【細やかな指導】 小規模校では、生徒一人一人の長所を多面的に捉え、細やかな指導ができる</p>
	運営 学校	<p>【地域とのかかわり】 地域が「おらほの学校」として大事にしてくれる傾向が強く、デメリットはほとんど感じられない。</p> <p>【教員の団結】 教員が一致団結して学校行事等に取り組み易く、管理職もリーダーシップが発揮しやすい。</p>
小規模校の課題	人間関係	<p>【関係悪化の際の修復】 生徒間、教師間の良好な人間関係が構築されていれば問題ないが、一度問題化されると修復が厳しいことが多い。(類似意見 2 件)</p> <p>【新たな能力の発掘】 教師の力に頼り過ぎ、生徒たちが持っている潜在的な調整力や課題解決の能力を引き出しにくいという課題がある。(類似意見 2 件)</p> <p>【その他】 小規模校でも「いじめ」や生徒指導上の問題、不審者等の課題はある。(ほか 1 件)</p>
	教育活動	<p>【指導上の課題】 発言力のある生徒が意見を述べると、残りの生徒が同調し、多様な意見や考えが出にくい。(類似意見 1 件)</p> <p>【地域性】 地域性にもよるが、狭い教育感で物事を判断することが多い。(類似意見 1 件)</p> <p>【その他】 学校行事や部活動などで、生徒、保護者、地域の要望や期待に十分に対応できなくなる。</p>

	学校運営	<p>【教員数】 教員定数を改善しないと免外が多く出て保護者からの苦情を受けやすいし、学習効率も下がることがある。(類似意見 5 件)</p> <p>【教員の指導力】 各教科 1 名で教員の配置が少ないので、教員の力量の問題と教師・生徒間の人間関係の固定化の問題が出てくる。(類似意見 2 件)</p> <p>【その他】 人数割りで算出するような経費等が割高になり、保護者負担が多くなる。(ほか 2 件)</p>
統合に対する考え方	推進すべき	<p>【多くの人とのかかわり】 学校は教師や友人、先輩とふれあい、切磋琢磨しながら、人との関わりを覚え、人間として成長する場であり、その意味では適正規模校で学ぶことが望ましい。(類似意見 2 件)</p> <p>【高校進学後も見据えた教育環境】 高校進学までを考えると、ある程度の規模の中で学校生活を経験した生徒の方が、より順応しやすいのと同時に、問題解決の糸口が発見しやすい。(類似意見 2 件)</p> <p>【地域の要望】 それぞれ学校創立の歴史性、独自性、地域や保護者からの要望等もあるので、それらの要望や意見等を十分尊重しながら進めていって欲しい。(類似意見 1 件)</p>
	慎重に検討すべき	<p>【地域性】 地域に学校が存在することにより、地域の活力、まとまりが生まれると思う。可能な限り地域の学校を大切にされた方が良いのではないかな。(類似意見 5 件)</p> <p>【他の手法】 学校の歴史、地域住民の学校に対する感情等を十分考慮する必要がある。学区の変更などで対応できるケースもあるのではないかな。(類似意見 1 件)</p> <p>【その他】 1 学年に 1 学級 20 名前後の生徒が在籍しているのであれば、適正規模などにこだわらず、存続させた方がよいと考える。(ほか 2 件)</p>
	その他	<p>【適正化をすすめるにあたって】 適正規模の基準が、小学校は 12 学級であるのに、何故、中学校は 9 学級であるのか、という住民の疑問に対して、「教員の定数法上、免外が生じる」という説明は、あまり説得力を持たないのではないかな。(類似意見 4 件)</p> <p>【教職員の資質】 小規模校であればある程、教職員の資質や力量が重要になる。(類似意見 1 件)</p> <p>【メリット・デメリット】 規模の大小により、それぞれメリット・デメリットがあるので、一概に判断できない。教育効率や生徒指導上の問題がある場合、個別の学校ごとの問題であり、学校規模の問題ではないと思う。(類似意見 1 件)</p>

## 仙台市立小・中学校の一定規模確保に向けた基本方針

平成20年8月

発行：仙台市教育委員会総務企画部学校規模適正化推進室

〒980-8671 仙台市青葉区二日町1-1

TEL 022-214-8431～2 FAX 022-264-4428

※ 再生紙を使用しています